木枯らし

自転車をこいで木枯らしに挑んでも
嗚咽はとどまるところを知らない
耳を切る寒気が、熱に浮かされた僕の眼を開かせる

（未来のことなど想ってはいない
　ただ、過去を失うことのみが怖い
　現在を得ることは不可能だ）

この真っ黒い夜の向こうに待っている者がいる
この嗚咽が故に僕を受けとめるべく胸を開いている者がいる
おお、走れ、走れ、舞踏会場へ向けて！

僕の身体を温めてくれるこの涙こそ
あの空に明滅する星々がくれた招待状
衣装はあの満月から降り注ぐ浄らかな光が準備してくれる

（未来などどうでもよい
　けれども熱望する場所がある
　過去、現在の向こうにある場所がある）

過ぎてゆく家々、そして街々
吼え狂ったように過ぎてゆく風か、それとも時間か
おお、走れ、走れ、無地の幻影に満ちた世界へ！

胸の底にとぐろを巻く野望を引きずり歩き
哄笑と諦念のうちに、明日という日を遠く望む毎日など
この道に置き去りにしてゆけばいい

走れ、あの夜の向こうへ！

(2004.1.10)